

《きい……ぱたん》

(扉を閉める音)

不愉快なやり取りを終え。そ知らぬ顔をして少女の待つ家へと戻る貴方。

ノラ

「……っ！ おっさん！！」

《たたたたた》

(駆け寄る音)

家に帰ると、顔を見た瞬間、ノラが弾けるように駆け寄つてくる。

貴方はその様子に、心配させないよう笑みを浮かべ、

【大した事はなかつた、話をしてみたら意外と話が分かる相手だつたよ。娼館の事はもう心配しなくていい、お前はもう自由だそうだ。

あと、親父さんにも会つてきたが……やっぱりまだ色々難しい様子でな。暫くは会わない方が良さそうだった……こつちは解決出来なくて悪かったな】

と、安心させるように、なんて事のない簡単な事だったと思つて貰いたくて、申し訳なさそうにしつつも明るく声をかける。

だがノラはそれを聞くと俯き、その肩を小さく震わせた。

ノラ

「……なんで、嘘つくんだよ」

肩の震えがそのまま声に伝わったかのように、ノラの言葉が揺れていった。

どうして嘘などと言われるのか分からず驚き、

【本当に解決したんだぞ？ 嘘じやない、もう安心していいんだ】
と貴方が告げると、少女は勢いよく顔を上げ怒ったように眉を吊り上げながら、貴方を睨んだ。

ノラ

「嘘だつ！！ うそつきつ！！

オレが何も知らないとでも思つてゐるのかよ！？ 一度娼館に売られた娘を、店がそんな簡単に手放す訳ないじやないか！！

それに、それにオレ……あんたが！ おっさんが心配で外に出て……教えて、貰つたんだからな！？

……すげえ額の金積んで、オレの事……買い戻してくれたって！

その金、どうしたんだよ？ ……おっさん、冒険の装備を整えるのに金貯めてたそうじやないか！

なのに、そんな事に使う金の余裕なんて、ある訳ないだろ！？ な

あ！？？

少女の叫びが貴方に刺さる。

【なんでそれを？ 一体誰が？】

少女には知らせぬようにしてていたはずの話であつたために、貴方は驚き、思わず呟いてしまう。

ノラ

「やつぱり……そうだつたんじやねえか。
外に出た時、前に……おっさんに抱き付いてた娼婦の、あの女がさ。
オレに教えてくれたんだ、『随分と愛されてるのね?』なんて言いながら。

……なあ、おっさんやつぱり、その貯めてた金つてのを?」

少女の言葉に、貴方は思わず呻く。

余計な重荷を感じて欲しくなかつたからこそ、大した事ではなかつたと
済まそうと思つていたのだが、その予定が外されてしまったのだ。
貴方は脳裏に浮かぶ馴染みである娼婦の顔を恨めしく思いながら、こう
なつては誤魔化せないと、大きくため息をつき、少女の言葉に頷いた。

ノラ

「……やつぱり、そうだつたのかよ。
なんで……なんでそんな余計な事したんだよ!!
その金、あんたの……おっさんの大事な金だつたろ!?
あなたの金をスロうとして、更には勝手に住み着いたようなクソガキに
出していい金じやないだろが!」

少女が、更に声を張り上げる。

何度も、どうしてだ、なんだと、繰り返し問い合わせるように叫び続ける。

その声に貴方は気まずげに顔を逸らし、黙つた。

少女を哀れに思つた、あんな下種な男がのさばるのが気に食わなかつた。

他にも幾つもの理由が頭の中に浮かんではいる。

けれど、一番大きな理由はと聞かれてしまえば……その理由は酷く利己的なもので、それなりに人生を生きてきた身で言うには、正直……氣恥ずかしいものであつたからだ。

ノラ

「…………つ」

少女が無言で貴方を睨む。

言わねば、絶対に許さないと思つてゐるだろう事が、その顔からは伺えた。

それは自分一人で生きていくしかないのだと、そんな悲しい覚悟を決めていた少女にとっては、余りに唐突で理解出来ない行為であつたからなのだろう。

何もしていながらそんな返しきれぬ恩を受け取らされるというのが、理解できないからこそどう気持ちを向ければいいのか分からず、困惑に、恐怖すら……感じているのかもしれない。

ノラの無言の圧力に、言わねばかえつて彼女を傷付けてしまうと悟った貴方は、また一つ、大きく、大きく……息を吐き出した。

それはため息というよりは、自分の思いを、恥ずかしさを、吐き出すための気持ちの準備、そんな吐息であつたのかもしれない。

自分のエゴを露に、正直に言わねばならない気まずさに耐えながら、貴方はゆっくりと口を開く。

【……一緒に居たいと思える相手が、自分を待つて家にいてくれる。それが何より心地よくて嬉しかつた。

それが無くなるのが、我慢出来なかつたって言つたら……嘘うか?】

ノラ

「……え?」

小さく……本当に聞こえるかどうかという小さな声で、貴方は気持ちを吐き出した。

それは子供が言う我慢のようだ、自分勝手で、身勝手な、どうしようもなく利己的な思いだつた。

少女が……ノラがいてくれる。その時間が、彼女がいるこの家が……何より大事だつたという、そんな子供じみた思い。

それを無くしたくなかっただけだという気持ち、それこそが貴方の中の最も大きな……偽らざる想いであつた。

【死ぬかもしれないと思つてモンスターと戦つて、切つた張つたで相手

を殺し、自分も傷付いて。

そんな憂きを晴らすように馬鹿騒ぎして、それでも何処か疲れたまま家に帰つてくるのがm日常だった……。

そんな中、お前が家にいて、飯を用意してくれていて、遅いだの怪我は大丈夫かだの、そう心配しながら『おかえり』つて言つてくれる。

それが…………どうしようもなく、嬉しかったんだ。

それが無くなるのは…………どうしようもなく、嫌だつたんだ】

一度言葉にすると、もう止まらなかつた。

貴方は、聞かせるつもりのなかつた自分の我儘でしかなかつた気持ちを、少女に打ち明ける。

どう思われるか、恐れる気持ちはあつたが…………それでも包み隠さず、真剣に。

ノラ

「あ……え」

ノラはそんな事を言われるとは思つていなかつたのか、目を丸くし、驚き戸惑いながらもただ黙つて聞いていた。

【助けたいとか、見捨てられなかつたなんて……綺麗な話じやないんだ。

何処までも自分のため、自分勝手に……お前に傍にいて欲しいと思つた。

お前に、この家に、このまま居て欲しいって……だからこうした。

……馬鹿みたいだろ？ 良い大人が、みつともなくて】

自嘲するような笑みが勝手に浮かんでくるのが、貴方には分かつた。けれど、それが一番の理由……言うつもりのなかつた、本音なのである。

少女は貴方の顔を見て、何かを言おうとし……言葉にならないのか、また口を閉ざす。

【……本当に、お前はもう自由だ。

娼館の奴等に狙われる事もないし、お前の父親にも……勝手ながら近寄らないよう、念押ししてきた。

でも、お前が出て行きたいと思うなら、父親の所に戻るのも、何処かで……一人で生活を始めるのも、全て自由なんだ。……でも「

少女が何も言わいために、貴方は言葉を続ける。

どうせ、一番恥ずかしい思いはすでに言ってしまったのだ。

それならば、恥を上塗りをした所でもはや構うものなど何もなかつた。

【……このまま、この家にいて欲しい。

傍にいて、今までみたいに……一緒に暮らして欲しい。

傍に、いて欲しいんだ……ダメか？】

ここまで来てしまつたならばと、全ての気持ちを吐き出す貴方。

大人として少女を守るような、そんな姿を見せていたいと思つていたはずなのに。

まるで自分が子供のように、こんな年下の少女相手に年甲斐もないと思いながらも、言わずにはいられなかつた。

ノラ

「…………バカみてー、そんな事言つて、恥ずかしくないのかよ、おっさん」

信じられないものを見るように、目を見開き貴方を見ていた少女が、ぽつりと小さく呟いた。

その言葉に貴方は、気恥ずかしくなつて苦笑をして、顔を逸らす。嗤われて当然の我慢だ……それが当たり前の反応だと、そう思つたためだった。

ノラ

「バカみてー……バカみてー。

そんな、そんな自分勝手な理由で……そんで、自分のために貯めてた大金使つて？

オレが、感謝とかしねーでおっさんの事嗤つて、どつかいっちまうとか思わなかつたのかよ？」

少女が呆れたとばかりに、皮肉気に口元を歪ませる。

貴方はまさにその通りだと、苦笑いをしたまま、

【そうなつた時は……そうなつた時で考えるさ】

と、そう言うしかなかつた。

ノラ

「……ふんつ、バーク、おっさんのバーク！

オレに甘いだ、未熟だなんだつて言つておいて、おっさんがよっぽど
考えなしのガキじやねえか！

バーク……バーク、おっさんの……バ、カ……つ」

少女の声が、突然詰まつた。

どうかしたのかと貴方が視線を戻すと、ぼろぼろと少女の目からは幾つ
も、涙が零れ落ちていつていた。

ノラ

「それ、つまり……オレと一緒にいたいつて、ことなんだろ？

オレと一緒に、”家族みたい”に過ごすのが……楽しかつたつて、こと
だろ？

なんで、出てくとか思うかなあ……！？ そんな事言われて、考へても
らつて……あたし、出て行ける訳ないじやないかよお……つ！！

ぐす、ぐすと涙に声を濁らせながら、少女が怒つたように貴方に言う。

ノラ

「ばー……か！ おっさんの、ばー……か！

あたしが、この暮らし……楽しくないと思つてるとでも、考へてたのかよ！？

……おっさんの、あんたの傍に居たくて、でもそれが迷惑になるつて、そう思つたから……出て、こうと……思つてたつてのによお！」

ぽろり、ぽろりと涙が伝い、地面に落ちる。

幾つも幾つも、少女が溜め込んでいた思いの数が零になつたように、滴つて（つたつて）いく。

ノラ

「聞いたからな……あたしに、いて欲しいつて……思つてたつて、聞いたからな！

絶対、もう絶対出て行つてやらないから……絶対だぞ！！」

《だつ！ ……ぎゅう》

（抱きつく音）

濡れる頬をそのままに、少女はそう言つて“あなた”に抱きついた。

貴方の胸元に湿り気と、じんわりと暖かい彼女の体温が伝わっていく。

ノラ

「ぐす……おっさんのガキ！ 我侭！……自分勝手！

もう、放さないで、くれるんだよな？ もうさんは……一緒に、いてくれるんだよな？」

貴方の胸に顔を押し当てながら、少女が問いかける。

胸に広がっていくその温かみを感じながら貴方は、少女を抱きしめ返す。

——当たり前だと、そう返事をするために。

ノラ

「……つ！……ばーか。

つたく、抱きしめる力が強すぎんだよ、おっさん……。
へへ、それぐらい強くあたしの事、放さないようにしてくれないと……。
承知しねえからな？」

涙に混じった声に、むず痒そうな、嬉しそうな声が混ざり……彼女が、笑みを浮かべたのが貴方には見ずとも分かつた。

貴方はそれに応えようと、ぎゅつと……彼女をより一層強く、抱きしめ返すのであつた。

《ぎゅう……》

(再び、抱きしめる音)